

4年ぶりの対面開催で
決意を固めあった出席者

9月13日に岸田首相がおこなった内閣改造が注目された。19人の閣僚のうち、2人だった女性が過去最多にならぶ5人に増えた一方で、54人いる副大臣・政務官は、11人からゼロに。2001年に副大臣・政務官のポストが導

入され、女性がゼロになったのは初めてだ。内閣を構成する計73人のうち、女性は8%で、低すぎる自民党国会議員の女性比率12%をも下回る。ジェンダー平等が政治と私たち有権者に問われる。

9月16・17日、福祉保育労は第39回定期全国大会を東京都内で開催し、2023年度運動方針案など8つの議案を採択し、新しい方針と役員体制を確立しました。代議員44人など85人が出席し、38人が討論で発言しました。1面に討論のまとめ、2・3面に討論の特徴を掲載し、大会の様態を報告します。

一人ひとりが
バージョンアップし

第39回定期全国大会 (9月16・17日 東京)

な
か
ま
を
信
じ
て
労
働
組
合
の
力
を
大
き
く



討論のまとめ (要旨)

ただし 澤村直書記長

自分事として自分の言葉で
発信して行動しよう



大会宣言 (要旨)

私たちは、福祉のにない手として、多くの福祉労働者、福祉を必要とする人たちとのつながりをつくってきた。次期大会に向けて、そのつながりをさらに大きく広げ、多くのなかまを福祉保育労に迎えていく。多くの福祉職場では、今もなお厳しい状況で働き福祉保育労の力を必要としているなかまがいる。新しい方針のもと、秋からの行動、署名、春闘アンケートを中心に、一人ひとりが活動に参加し、力を合わせてとりくんでいく。

特別決議 (要旨)

私たちにとって、あるべき社会とは、人が大切にされ、命や人権が守られる社会だ。貧富の格差を拡大し、国民の分断をすすめ、憲法で保障される人権を蔑ろにする政治に対しては、勇気をもって「NO」をつきつけ、行動していこう！ 早ければ、この秋にも総選挙が行われる可能性がある。私たちは、全国のなかまと語り合い、この時代の課題を共有するとともに、福祉労働者として、あるべき社会に向けてこれからも尽力していく。

第39回大会スローガン

- ◎すべての活動で「なかまを増やして要求実現」を実践しよう
- ◎ただかろう労働組合へのバージョンアップで要求実現をめざそう
- ◎全組合員が最低賃金と職員配置基準の引き上げ運動に加わろう
- ◎憲法と平和を守る政治に変えて人権とケアが大切にされる社会にしよう

組合の力で
不安を希望に
変えていこう

労働相談のなかで、相談してきた職員が「自分の抱えてきた不安が、組合の力で変えられるんじ

活動の「見える化」
小グループで議論
支援をすすめよう

活動が停滞していたなかで会議を定例化し、労使協議の成果をニュースで伝えて、労働組合を未加入者に見ええるようにしてきた報告は教訓的だ。少人数のグループに分か

なかまを増やしながらか要求を実現する、実現したことでなかまが増える好循環が生まれつつある。ていねいな要求討議でみんなが要求に確信を持つこと、憲法で保障された権利を行使して団体交渉で賃金・労働条件の

改善を勝ち取っていくことが大事だ。その一番大きな武器のストライキ権について議論を深めてもらいたい。ストに限らず、私たちの現状から半歩でも一歩でも前に出ることがバージョンアップととらえて、まず声をあげることも含めて実践をすすめよう。職場でのたたかいと行政への制度闘争をあわせてすすめる。ここに加わるなかまを増やすことが大事で、組織拡大と結びついた時に労働組合の力が発揮できる。さまざまな問題を自分事として、自分の言葉で発信して、自分が行動していくことを大切に、運動をすすめていこう。

バージョンアップ
一人ひとりが考え
発信して行動へ

やないかと、希望に変わった」ということが大事な視点だと思ふ。地方協議会、中央本部、地方労連などの力もかりながら、組合にまだ出合っていない人たちに、「組合って頼りになる」「大変さが希望に変えられるんだな」と感じてもらえるようにしていこう。

現場の組合員といっしょに考えることや、地方組織の役員が分会を支援していく工夫も示された。大きな役割と期待のある地方協議会も地方組織の状況を把握し、必要な議論と支援・実践をすすめよう。

また保育園の
通園時に車中に
置き去りにさ
れ、2歳児が亡
くなる痛ましい
事故が起きた。

「考え事をしていたに忘れた」という祖母が逮捕されたが、遺族も当該の園の職員も悲しみは尽きないはずだ。大阪府も昨年起きた同様の事故を受けて、保育施設での置き去り事故の調査をHPで公表し、登園時の出欠確認や、保育の場面転換時毎の人数確認の徹底をよびかけている。また、こども家庭庁の保育施設での重大事故調査でも事故件数が増加したという。しかし、子ども一人ひとりにていねいに扱われる十分な人員配置と現場のゆとりを、府と国の責任で保障する具

でもギリギリの職員体制で精一杯の現場が、ますます追い詰められるだけだ。私たちの運動もあって「75年ぶりの配置基準改善」に風穴を開けた。子ども・利用者・労働者の「人権」を守るたたかいは、日々の激務やあきらめ感、権力の圧力・分断などで簡単にはいかない。それでも、先日の全国大会では、語りあい、寄り添い、学び伝えながら奮闘している全国のなかまの姿に元気をもらえた。一人ではなく、あなたと、みんなと、なかまと一緒にがんばらる労働組合の大切さを改めて実感した。全国のなかまとつながり、団結して運動をすすめていきたい。

(藤原)

